姫と執事

＊いちごみるく＊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫と執事

【Ｎコード】
Ｎ０７６８Ｐ

【作者名】
＊いちごみるく＊

【あらすじ】
日本の科学が進歩しつつあるとき、まだ発見されていない不思議な不思議な、惑星があった。
そこにいる特別な人種は魔法を使い、不思議なシステムに縛られている。
そこに住むアルトとルチア。
２人は階級からしてちがい、けして結ばれてはいけない関係だった

＊プロローグ＊

＊プロローグ＊

『ずっと友達だよ』
小さい頃、ルチアがいっていた。
俺達はずっと一緒だった。
でも…よくよく考えたら…

やっと小説家デビューです☆☆よろしくお願いしますっ♪
つまらないと思いますが、付き合ってやってくださいっ＞＜
誤字・脱字があると思いますがその時は申し訳ありません；

あと、コメくれると嬉しいです（＊＾ｏ＾＊）

※性的な部分や残酷な描写がありますが気分が悪くなっても責任を負えません。
気分が悪くなったらすぐに退場してください。

＊人物紹介＊

＊ルチア＊
18歳。
フルーツ国の第2王女。いわゆる王族。
150？の小柄な女の子☆いちごみるくが大好きで、いつも飲んでいる。
王女にしては庶民的で、サバサバしている。
少食。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
＊アルト＊
18歳。ルチアの幼なじみ。
有名な執事一家に生まれた。
階級は侯爵。面倒見のいいお兄ちゃん的存在。
意地悪なところもしばしば……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
＊メイサ＊
18歳。ルチアの幼なじみ。
1人だけ一般庶民。
元気なムードメーカー。狭い部屋に妹と2人暮らし。毎回、皆に掃除に来てもらってきている。
勉強できないおバカさん。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
＊ルイス＊
18歳。ルチア達の親友。

ルチアと同じ、王族。
レインボー国第1王子。
姉2人にこき使われるかわいそうな子。
頭がいい。勉強ではアルトに敵視される（笑）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
＊その他＊
＊テノール＊
アルトの双子の妹。めっちゃ似ている。女執事。
＊レモナ＊
ルチア母。
サバサバしたヤンキーっぽい母。
＊ペルセウス＊
ルチア父。
イケメンで娘を心配する優しいパパ。
＊シェリア＊
ルチア姉。
闇の仕事をしている、レモナ似の姉。
＊アリタミス＊
ルチア兄。
全然目立たないかわいそうなお兄ちゃん。
ペルセウスにそっくり。

その他にも沢山出てきますが、そのつど紹介します。

＊第1話＊（前書き）

第1話です☆☆

若干アルトとルチアにかたよりが出た様な…

まっ……

気にせず読んでくださいなっ；；

それではどうぞ…♪♪

＊いちごみるく＊

＊第1話＊

～アルトＶｅｒ～

メイサに紹介されて、始めて会ったとき、俺は『かわいい子だな』と思った。

その頃のルチアは、今より髪が短くて肩くらいのショートヘアーだった。

猫っ毛でふわふわした金髪ブロンド。

小さな手で、必死にうさぎのぬいぐるみを抱きしめるルチアは誰もが認める可愛らしい少女だった。

～ルチアＶｅｒ～

メイサが、「友達紹介するよっ！」

と言って私を城から連れ出した。

始めて大地を踏んだ。

見るもの全てが綺麗で私を全ての物に感動した。

「どこにいるの？」

と私はメイサに聞いた。

「もうすぐ！」
とメイサは言った。

しばらくするとお屋敷が見えてきた。
そこに1人の男の子がいた。

私と同じくらいの男の子。
城にいる執事さんと似た格好をしていた。

『アルト』とメイサは呼んだ。

振り向いたその子はすごくかっこよくて、大人っぽかった。

「こんにちは」
その子は言った。
私も「こんにちは」って言った。
「僕はアルト。ここで執事をやってるよ。よろしくね。」

びっくりした。私と同じくらいの男の子がもう働いているなんて…
……

ここでは普通なのかな…

そんな衝撃の出会いから私たちは始まった……

＊第2話＊

「ん～～っっ」

ピッカピカの太陽が昇って木の上の小鳥が鳴く頃。私は目を覚ました。

「今日は早く起きたなぁ…」

いつもはもう少し遅い。

「今日は日曜かぁ…」

半睡状態で、1階の大広間へと降りた。

「あらっおはよう、ルチア（。▽。）／今日は早いのね。」

お母さんが声をかけた。

「はょ…。今日は何だか目さめた。」

「そうなのー。なんか起きそうねー（笑）」

なんてふざけたお母さんは、立ち上がり、お父さんを起こしにいった。

ガチャッ

「おはよう。ルチア。早いのね。」

夜の仕事を終えたお姉ちゃんが帰ってきた。

「おはよう&おかえり。今日もすごい返り血だね；」

「ん？ぁあ…昨日は結構激しかったからねー。」

いつも激しいのに…

どんだけさ…

と思いつつ、口には出さなかった。

「おはよ～～（ー．ー）」

お父さんが起きてきた。

「おはよう、お父さん。昨日は夜遅かったの？」

「う～ん…まぁね；大臣が貯めるから……チッ」

；；；

大臣はお父さんをいじめるのが好きらしい…

かわいそうだ…

＊第3話＊（前書き）

〜補足〜

登場人物？的な人

＊作者B＊

いわゆる神の声です；

ちょいちょい出てきます。ちなみに私だったりする…（笑）

＊第3話＊

「まっいいや。あたしアルトんとこ行ってくる。」

「アルトくん家？そう…行ってらっしゃい。」

「行ってら。気をつけるのよ（、ゝ、）フッ」となんだか怪しい笑みを浮かべるお姉ちゃん…

「何にもないから安心しな（笑）じゃっ、行ってきま～す♪」

私は足早にアルトん家に向かった。

～アルトん家～

「ぁあ～……ヒマ！！」

執事の仕事も今は休憩中。とにかくヒマだ。

「何すっかな～…」

そう呟いていたその時…

バンッ！！

「やっほ～！！アルト♪」

勢いよく窓が開いてルチアが飛び込んできた。

「ビクッッ！！」

寿命が3年くらい縮んだ気がする……

「お前っっ……窓から入ってくんなっ！！」

「いーじゃん、いつもの事でしょ♪」

「だからってぇ…」

こいつに何を言ってもムダな気がする…

「んで？何用？」

「特にないけど。暇だから来た。」

「……そうですか。」

俺の返事を聞くと、ルチアは堂々と俺のベッドに潜りこんだ。

「アルトの匂いがする…」

なんてこっぱずかしいセリフを普通にはくんだ…

「当たり前だろ。毎日寝てんだから。」

「……。」

んっ？？？

返事がない…

まさかっっ！！！

「……ＺＺＺ」

寝るなーー！！！！！！

といってももう遅い。
こいつは1回寝てしまったら、しばらくは起きない。

「はぁ……。」

最近ルチアはよく眠れないらしい。
不眠症だ。

だから毎日大量の睡眠薬を服用してると言っていた。

俺は執事だから健康にはうるさい。
だからここで少しでも寝られるならそれでいいと思う。でも薬の大量服用は許しがたい…。

1つ不思議な話をすると――王族は特殊であるということ。

どんなに大量の薬を飲んだって、ナイフや剣で切りつけられたって、銃で撃たれたって死ぬことはない。

ただ苦しみ、もがくだけだ。

そんな特殊な環境で生きてるルチアを見てたら、自分がどれ程小さなものなのか考えてやまない。

そんな事を日々俺は考えているのだ。

アルトはルチアの髪をそっと撫でた。

1つため息をつくと、また仕事に戻っていった。

＊第４話＊

「ん……。」

自分の部屋じゃない…

「そうだ…。ここアルトの部屋だった。」

まだ視界がハッキリしてこない…。

ガチャ。

誰か来た。

「アルト兄？」

視界がハッキリした時アルトが見えた。

いや。よく似てるけど、アルトじゃない。女の子だ。

「テノールちゃん？」

「んっ？あ、ルチア。またアルト兄のベッドで寝てたの？」

「んー。眠くて（笑）」

「そう。もうほぼ毎日だからびっくりしなくなるわね。」

「ははは～。」

「まっアルト兄いないならいいや。どこに行ったのかしらねー。」

「プチ行方不明？」

「そんなとこ。じゃまたね。」

「ぅーん~ ―~」

「あっ。そうそう。あんまり寝てるとそのうちアルト兄に襲われるわょ（笑）」

バタンッ

「へっ？」

よくわかんないけど、注意されたのかな？

「ていうか、会うたびに似てきてるよなぁ…」

テノールちゃんは、アルトと双子の妹。そっくりすぎて、たまに入れ代わってててもわかんない。
アルトの影武者的存在といった所だろうか。

声もほぼ一緒だし。
それってアルトが女声なのかなぁ…（笑）

でも、テノールちゃんは最近女の子らしくないことを気にしてるらしい…

だからこんな事言えないなぁ…。

ガチャッ。

「ぁあ〜…つかれた。」

と執事服のアルトが帰ってきた。

「おかえり。」

「おう。ただいま…。ってルチア、まだ居たのか；」

「うん。ダメだった？」

「いや、別に。」

そう言ってネクタイを緩め、吸い込まれるようにベッドに倒れこんだ。

そうとう疲れてるみたい……。
ここは帰った方が良さそう…

「じゃっ。帰るぉ。またね。」

「おぅ……。ってもう夜だし、今日は満月だろ？危険。泊まってけ。」

「えっ…。いいの？！」

「いいよ。てかそれ期待してたんだろ。」

「あ、バレた？（笑）」

「バレバレ。」

［今日は友達の家に泊まってくね～ε＝（ノ。ー。）ノ］

お母さんにメールをしておいた。

最近はほぼアルトん家に泊まってるようなものだから、お母さんも

きっとわかるだろう…。

ピロリロリン～♪

［了解（o＾－'）b］

お母さんからＯＫメールが来た。

お泊りだけど、よくある少女マンガみたいに

「ドキドキする～／／／」

というものは一切ない。

これも、ただの幼なじみとくらいしか思っていないからだろう…。

きっとアルトも。

＊第5話＊

前回の話でアルトん家に泊まる事になった私は、今はお風呂に入ってます。

あっそうだ。満月の日に外に出ちゃいけないって理由、まだ説明してなかった。

それは、ヴァンパイヤが出るから。

満月の日になると、「夜の国」にいるヴァンパイヤがいっせいに飛び出してきて、夜の空を完全に埋めてしまうほど、沢山のヴァンパイヤが飛び交うのだ。

それから、ヴァンパイヤに血を吸われないように、家の中で窓をきっちりしめて、寝ていなさい。と言われるようになったんです。

私もかつてその被害者。

あれは、私が5歳の時…

アルトとメイサとの3人で楽しく遊んでいた日、私たちはいつの間にか森の中に、迷いこんでしまった。

〜13年前〜

メ「あると〜！ここどこ？」

ア「わからない。まよっちゃった…。」

ル「もうでられないの？」

ア「だいじょうぶ。きっとおうちのひと、みんながみつけてくれるよ。」

メ&ル『うん…』

しばらく私たちはあるいていたけど、出口は見えそうになかった。

メ「あっ…まんげつ…！。」

ル「まんげつ？じゃあ、きょうはおばけでるよぉ～。」

ア「うん。はやくかえらないと…」

バサッバサッバサッ！

ル「はねのおとっ！」

ア「ばんぱいやがちかくにきてるのかも！」

メ「おそわれる〜！」

ア「あっ！あそこにあながある！あそこにかくれよう！」

そうして私たちは近くにあった洞窟へ身を隠した。

ル「まっくらだょ〜…」

ア「だいじょうぶだよ。こわくないよ。」

メ「なんかでそうだよ。」

作者B：そうして3人は洞窟の奥深くへと進んだ。

ア「ふぅ…。ここなら安心じゃないかな。」

ル「うん。」

メ「あかりない？くらくてよくわかんないや。けっこうあるいたのはわかるけど…」

ア「う～ん。ないや…。」

ポワン……

B：周りが明るくなった。ルチアが魔法で明かりをだしたのだ。

ア「ありがとう、るちあ。」

私たちは、ただ黙って座っていた。ヴァンパイヤに見つからない事を祈りながら…

メ「いま、そとはどうなっているんだろう…」

ア「わからない…。」

ル「わからない…。」

……。

ア「もういないかな。ばんぱいや…。」

ル「う～ん…。そと、でてみる？」

メ「でも…もし、まだいたら…。」

ル「でもいつまでもここにいたらかえれないよ。いこう？」

ア「いこうか。」

メ「うん…。」

そうして私たちは外に出てしまったのだ…。
この先にある危険に気づかずに…

＊第6話＊

ル「もういないみたいだよ？」

外に出てみると辺りは不気味なほど静まりかえっていた。

メ「もうおうちにかえったんじゃない？」

ア「うん。だいじょうぶそうだね！そろそろいこう。」

ル「うん。」

歩みを進めようとしたその時だった

？「血……血を飲ませろぉぉぉ！！！」

ル&ア&メ「！！！！！！！！」

ア「！！ばんぱいやだ！ふたりともはしって！！」

ヴァンパイヤ「血……血を飲ませろぉぉぉ！」

ヒュッッ！！！！

ル「あるとっあぶないっ！！」

ア「えっ……」

頭上には大きな体のヴァンパイヤ……

もうダメだ…

ギュッと目をつぶった…

ヒュッッ！！

ア「……っ……いたくない？？」

ズルッ

目を開けるとそこには血まみれのルチアがいた。

ア「るちあ？るちあ？るちあっ！！るちあっっ！」

……

私は王族。死ぬ事はなかった。

でも……

襲われた時の傷は今でも背中にある。

これを見るたびに思い出す……。

今にも泣きそうな幼いアルトの顔が……

＊第7話＊

ガチャ…

「アルト～お風呂ありがと……」

「…ｚｚＺ」

「寝ちゃったか…」

（大分疲れてたもんなぁ……）

ぐっすりだなぁ（笑）

泊まりたいって言ったのは私だけど…やっぱ帰ろ。なんか悪いし…

私は窓に手をかけた。

「おい…」

ビクッ

「あー…起きちゃった？…」

「起きちゃった。つか泊まってけって言っただろ。」

「だっ…だって…」

「お前の事だから迷惑とか思ってんだろ？大丈夫だよ。全然迷惑じゃねぇし。てか帰られてヴァンパイヤに喰われる方が迷惑。」

「うぅ……。」

ごもっともで。

「素直に従え。」

「はい……。」

私ってコイツより階級、上のはずなんだけど…

結局…泊まった。

＊第8話＊（前書き）

始まって以来、やっと初のドキドキ要素（？）があります＋（・、ω・）ｂ

＊第8話＊

「……ん……。」

まだ太陽は昇ってない。

携帯の時計を見るとまだ夜中の1時だった。

はぁ…。また中途半端な時間に起きちゃった…

寝返りをうったら床にアルトが寝ていた。

そういやぁここ、アルトの部屋だった…

床に寝かせてごめんね。

なんとなく悪い気がした。

関係ないけど、アルトって何気に「イケメン」だよなぁ…

まぁ王族はみんな『美男美女』だって言うけど…

王族以外でここまでイケメンなのは珍しい。

アルトをじっと見てる自分に恥ずかしくなってまた寝返りをうった。

（……寝れない。）

目が冴えてしまった…

あっ……そうだ。

――睡眠薬――……

起き上がってアルトを起こさないようにこっそり魔法を使って召喚した。

キュッ　ザラッ

薬を口に近づけた時……

「何してんだ」

ビクッ！！

アルトが起きていた

「お…起きてたの？」

「さっき起きた。てかそれ……睡眠薬？」

「……うん。」

「ちゃんと量守ってないだろ。」

「…だって効かないんだもん。」

「効かないからって大量に飲むものじゃないの。」

アルトは私から薬を奪った

「あっ……」

「はぁ…まったく…。……眠れないのか？」

コクッ

私は静かに頷いた。

「……。じゃあ一緒に寝るか。」

「えっ……／／／」

「何だよ。ちょっと前までは一緒に寝たろ？」

ちょっと前って、小学校の時の話だし……

そんなことを考えてたらアルトがベッドに入ってきた。

「ちょっ…まだ一緒に寝るとは…「ほら、つべこべ言わず寝る！！」

「…／／／」

「ルチアでも照れるんだ。」

「…／／／照れてないもん」

「ふーん。」

次の瞬間、後ろに引き寄せられた。

私はアルトの腕の中にいた。抱きしめられている……

「えっ……」

「こーしたら安心する気がしない？」

たしかに…

強いけど、暖かい、優しいアルトのぬくもりが体全体に広がっていく。

ちょっと照れるけど……安心するかも……

私はいつの間にか深い眠りについていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0768p/

姫と執事

2011年6月25日12時12分発行